

軍艦長門の生涯

上巻

阿川弘之



ぐんかんながと しょうがい
軍艦長門の生涯 上巻

昭和五十年十二月五日発行
昭和五十四年四月二十日十一刷

著者 阿川弘之（あがわひろゆき）

発行者 佐藤 亮 一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号一六二 東京都新宿区矢来町七一

電話 業務〇三（三六）五一一一
編集〇三（三六）五四一一 振替東京四一八〇八

印刷所 二光印刷株式会社

製本所 新宿加藤製本

定価一二〇〇円

© Hiroyuki Agawa, Printed in Japan, 1975.

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

軍艦長門の生涯

上卷

序 章

子供のころ、広島の私のうちから川一つ向うに、高木義夫という友だちの家があった。学校の終ったあと、始終往き来して遊んでいた。義夫のところへ行くと、兄の正治も入ってよく新版いろはカルタが始まった。義夫たちの父親の正三さんは現役の海軍主計大佐で、祖父の佐久間義一郎も明治海軍の主計大監、「軍艦造りの博士平賀譲はうちの親類だ」と義夫に聞かされたことがある。カルタを取りながら、私は此の一家から海軍のことを色々教えられたのだろうと思うが、「ち」の「鎮守府、横須賀、呉、佐世保」というのが一つ、のちのちまで記憶に残っていた。

これが昭和五年「少年倶楽部」新春号附録の「新案物識りかるた」というものだったとあらためて知ったのは、さきごろ講談社から「少年倶楽部名作選」の口絵のかたちで

復刻版が出てからである。

「ロンドン世界の最大都会」

「陸軍の兵力十七師団」

「ぬれ手で電燈さはるは危険」

「陸奥と長門は日本の誇り」

と、昭和初期の内外世相を反映したような四十八枚が、「鎮守府」の一首をまじえて色刷りで並んでいるのを、四十幾年ぶりに私は見た。

義夫とはちがう家庭に育った小学三年の自分が、海軍の艦艇に当時の程度の関心があったか覚えなないけれども、年表を繰ってみると、私どもが物識りかるたで遊んだ昭和五年はロンドン軍縮会議の年で、「陸奥と長門」の長門が完成して十年目にあたる。妙な縁だが、軍艦長門は私の生地広島市に近い呉海軍工廠において、私と一と月ちがいの大正九年十一月に誕生している。

義夫の兄高木正治は、東京商大を卒業後、戦争中の昭和十七年九月三十日第九期補修学生として築地の海軍経理学校に入り、祖父から数えて三代目の主計科士官になった。

同年同月同日、私も第二期の兵科予備学生として海軍に入った。義夫は眼が悪くて、希望の海兵へ進めず、建築家になって、戦後平賀譲の長男謙一と同じ建設会社につとめていたが、二年前病歿した。戦艦が各国海洋戦力の象徴であった時代は疾くに終ってしまっただけで、私は自分と同年

同郷の長門の一生を、一つの物語として書き綴ってみたいと思う。

伝統芸術の分野は別として、戦前の日本で真に世界の水準に達していたものが三つあったと言われている。

帝国海軍。

三井の貿易。

水上日本。

鶴田義行と小池礼三が二百メートル平泳で一二位を占め、八百メートル・リレーで日本チームが優勝し、前畑秀子が女子二百メートル平泳で銀メダルを取り、水上日本の存在を世界に示したロサンゼルス・オリンピック大会が、「物議りかるた」から二年後の昭和七年。今なら衛星中継、カラー・テレビの実況放送であるが、

「いよいよ最後の十メートル、鶴田、小池、ますます力泳、小池、鶴田に迫っております。その差わずかに一フィート。あと五メートル、あと四メートル、小池、鶴田、死にもの狂いのピッチ」

「鶴田あと一メートル、半メートル、ゴールイン。鶴田一着、小池、つづいてイルデフォンゾ、ジータス、アジャルデン、中川」

と、松内則三アナウンサーの名調子が、太平洋を渡って茶の間のラジオに聞えて来た。

私は小学校の六年生になっていた。生家のすぐ近くに、

四百メートル自由型三位の大横田勉選手の家があって、学校の行き還り、尊敬のまなざしで大横田家の標札を眺めたものであった。

日本選手が入賞すると、ロサンゼルスプールサイドに日章旗が上がり、「君が代」の奏楽がおこる。ラジオでその光景を聞くのは嬉しかったが、私はどういふものか、日本の旗としては軍艦旗の方が日の丸より好きであったし、何か力強いような気がしていた。将来海軍士官になりたいとは思っていなかったで、これはもしかすると、海軍という存在が、日本の国力の平均水準よりずっと高いところにいることを、子供ながらに承知していたのかも知れない。昭和期に入ってから日本の陸軍は、その大言壮語にもかかわらず、世界の軍事専門家の間で軽んじられていたようにだが、海軍に対しては、どの国も一目おかないわけには行かなかった。日本は当時、英米につぐ世界第三位の海軍国で、フランス、イタリー、ドイツ、ソ聯の海軍を、質量ともにはるかに引きはなしていた。

三井の貿易はあまり意識しなかったが、帝国海軍と水上日本とは、少年期に達して以後たしかに私たちの誇りであった。逆に言えば、そのころ日本の子供が、世界に向かって自慢出来るものは海軍と水泳くらいしか無かったというこ

ともなる。

海軍を誇りに思っている「少年倶楽部」の愛読者にとって、聯合艦隊の精鋭が全滅する日が来ようなどとは、もとより想像外の話であったが、世界的な視野でこれを見るなら、日本海軍がすぐれていたのはやはり比較級の問題に過ぎません。

「無敵の艦隊」

勝利のつばさ

などと、軍国歌謡の作者といっしょになって、自身で、「ひよっとすると、真実世界無敵なのではあるまいか？」と思いますはじめた時から、帝国海軍は滅亡への道を歩み出します。

軍艦の研究家として著名な福井静夫は、対米開戦の少し前、巡洋艦鳥海の士官室で、海軍報道部平出英夫大佐の「艦隊五百、海鷲四千」という言葉を耳にした。

士官室の反応は、「不愉快」の一語につきたそうである。「いくら何でも、こりゃあ、吹きすぎだよ」

と、苦々しげに言う者もあった。

末期の長門艦長をつとめる渋谷清見少将は、昭和九年、末次信正大将の率いる聯合艦隊が、末次の郷里の山口県三田尻沖に入港した時、土地の新聞が「無敵艦隊」という大活字で紙面を飾ったのを見て、イヤな思いをした記憶があると書き残している。「それを当局は制止もせず、この頃

から段々沈黙の伝統が崩れ出し、開戦前にはもう後へは引けぬというような世情を作ってしまったのではないだろうか」と。

部内一般の空気には、そういうものがあつた。しかし、海軍も亦時の流れを抑え切ることは成し得なかった。一旦抑止力としての留め金をはずしたあと、日本が空と海に、きのこ雲のようなとてもない大部隊を擁したのは、それが崩れるまでのほんの短い間であつた。

「艦隊五百」のうち、第二次世界大戦中に日本が保有していた戦艦は十二隻である。

私が兵科予備学生として海軍に入った昭和十七年の秋、教官が座学の時間に、

「日本の戦艦の名前を、知っているだけ挙げてみよ」

と言ったことがあつた。

私どもの多くは、少年時代から、「陸奥長門、扶桑山城、伊勢日向」と口調で覚えていた。義経千本桜の四天王「亀井、片岡、伊勢、駿河」と同じで、馬鹿に調子がいいからすぐ答えられる。

それに巡洋戦艦として生れた「金剛比叡、榛名霧島」。

「よし。それでよし」

「教官、未だあります」

と、一人の学生が手を挙げた。

「大和武蔵」

教官はにやっとした。

「そんなものは知らんでよろしい」

開戦後就役した「知らんでよろしい」大和武蔵を加えて、基準排水量で総計約四十八万トンの戦艦群は、長門を除いて、終戦時まですべて、沈められるか自沈するか、アメリカの飛行機にやられて海底に大破着座してしまった。「思ひもよらず我一人」という古い陸軍の軍歌のように、

十二隻中たった一隻、長門だけが不思議に命永らえて敗戦を迎えた。昭和二十年の八月十五日、長門はボイラーの火を消し、あわれな姿で母港横須賀の小海岸壁に繋留中であつたが、ともかく帝国軍艦籍に在る軍艦として生きていた。

生じつか生き残ったばかりに、長門は敗戦の翌年、ビキニへ連れて行かれて、アメリカの原爆実験の標的艦としてその生涯を閉じる。世界最大最強の戦艦として生れ、長く聯合艦隊の旗艦をつとめた「日本の誇り」は、今も中部太平洋の環礁の中に眠っている。

第一章

こんにちでは日石丸のような三十七万トンもあるマンモス・タンカーでも、生れ出るまでに人間と同様十ヶ月しかかからないが、昔はそうは行かなかった。特に軍艦の建造には、大きなものになると三年四年の長い歳月を要した。呉海軍工廠の造船ドックに、長門の最初のキールが据えられたのは、完成に先立つ三年三ヶ月、大正六年の夏で、

「新艦起工ノ件」

一 軍艦長門

大正六年八月二十八日起工

右報告ス」

という、呉工廠長から海軍大臣にあてた一通の書類が、長門の受胎告知書である。当時の海相は、日露戦役日本海

の海戦に、東郷平八郎の参謀長をつとめた加藤友三郎大将

であった。

加藤は、文久元年（一八六一）、浅野藩士加藤七郎兵衛の三男として、後年の原爆中心地に近い広島の手町というところで生れた。新井達夫の書いた伝記を読むと、子供のころの加藤は、「ひいかち（カンシャク持ち）の友公」という綽名で、たいへん利かん気な荒っぽい我儘者であつたらしいが、長じてのち、聡明で穩健理智的な、リベラル派海軍軍人の一方の旗がしらの存在となつた。

近代日本海軍の基礎をきずいたのが山本権兵衛なら、その近代海軍を育成し、八八艦隊の建造に心血をそそいだのは加藤友三郎であり、同時に、海軍を戦争の抑止力と考え、晩年「不戦海軍」の思想を強く唱道したのも彼である。

加藤海相に長門の起工を報告した呉工廠長は、加藤より六年後輩の伊藤乙次郎中将、時の呉鎮守府司令長官は、海相と同姓で三年後輩の加藤定吉中将であつた。

この書類には、日本の造船界の至宝といわれた平賀讓博士のサインが見える。海軍次官は、終戦時の首相、鈴木貫太郎中将である。試みに成績を調べてみると、平賀がクラスの一番。鎮守府司令長官の加藤定吉も兵学校十期のトップ、伊藤工廠長も十三期のトップ。卒業成績のすぐれていた人が、必ずしもすぐれた提督であつたとは言えないけれども、海軍はトップ・クラスの頭脳をもつて、長門の受胎を見守らせていたという感じは受ける。

船の起工に際しては、起工式が行われる。英語でキール・レイニング・セレモニーといつて、これは西欧でも、縁起をかつぐのと一つのけじめをつける意味合いとで、古く木船時代から行われて来たしきたりであつた。よその国ではどういふことをするのか知らないが、日本では現場に小さな祭壇をしつらえて、神主にお祓い（はら）いをしてもらう。一般の建物でいえば地鎮祭である。

陸奥は横須賀の船台で建造されたが、長門は造船ドックでの建造であつたから、巨大なブルーのようなドックのほとりに、竹を立て、しめ縄を張つて、起工式用の祭壇がもうけられた。呉の町から、龜山神社の神官が出張して来る。お経に僧侶の独創というものは入らないが、祝詞は一つ一つ、神官の創作物である。ただし、船の起工式なら起工式で、一応の形式は決つていた。

「海の護りは片時も怠らず、国の使命（しめいめい）の船造り、黒鉄の真鉄巨船、世界に誇（ほ）るる工業の蘊奥（うんおく）を秘めて究めて事始めむと今日の生日（なうひ）の足日（あしひ）に幣（へい）取持（と）らて、神の稜威（りやうゐ）を仰ぎ乞（こ）ひ奉（た）るは」

というような祝詞を神主が読んで、それから来賓の鎮守府司令長官以下、玉串奉饗（たまぐしほうかう）。神官たちが帰って行くと、関係者一同ドックの底へ下りて、工廠長の伊藤中将が第一紙（び）を打つ。第一紙とかキール・レイニングとかいつても、儀式だから、實際は事前に、平板キールとヴァーティカル・

キールがボルトで組立てである。この少量の鉄材が、軍艦長門の胚芽で、艦の中央部の底になる部分であった。

工廠の最高責任者である工廠長は、多くの場合技術屋ではなかった。伊藤乙次郎中将も、兵学校出の兵科将校で、素人の老人にほんとに鉄を打たれてはたまらないから、儀式用の新しい槌でトントンと打つ真似をしてもらうだけである。そのあと、熟練した鉄打ちの職工がほんものの第一鉄を打ちこんで式を終る。

一般に起工式は、進水式にくらべると非公式の簡素なもので、皇族の台臨も無く大がかりな宴会も行われないが、式がすむと船殻工場に席を設けて、とりあえずするめと冷酒で乾杯となる。

造船部の部員たちはたいへんであった。何しろ工手や組長といえ、うわばみみたいなのが揃っていた。ふだんでも、何か理由をつけては一杯やりたい方で、夕方船殻の事務室をのぞいてみると、「五百トン祝い」とか「千トン祝い」とかいって、幹部工員たちが一升瓶を傾けている。ある時、一人の技術士官がそれを見とがめて、

「君たち、おとつい千トン祝いをやったばかりじゃないか。さようは何の祝いだ？」

と聞くと、

「きょうは部員、千五十トン祝いですよ」

組長が壁の図表を示して答えたという話がある。

長門の起工ともなれば、彼らの胸にはこれから世界一の戦艦を造るのだという誇りと意気こみもあり、一方色々素からの不平不満もあり、

「ばんざい、ばんざい」

「わあッ」

という騒ぎで、早目に逃げ出さないと、飲んだ勢いに若い部員など、胴上げて天井へほうり上げられる。

こうして氣勢を上げておいて、さて次の日から、三年三月に及ぶ本格的な長門の建造工事が始まるのであるが、長門起工の直前、フランス海軍の二隻の駆逐艦が、呉工廠の造船ドックで完成して海へ出て行った事実は、あまり世間に知られていなかった。駆逐艦と戦艦では、むつかしさがちがうが、自前でやると戦艦が造れるようになって六年目に、日本の海軍と造船界は、フランスから駆逐艦建造の依頼を受けていた。

当時、ちょうど第一次世界大戦の最中で、フランスは海軍工廠も西部戦線向けの陸軍の大砲製造に追われていて、とても軍艦までは手がまわらない。英国は、自分のとこの艦船の修理と建造で手一杯である。アメリカは、この年四月に参戦したが、それまでは表向き中立国で、大っぴらに兵器の受託が出来なかった。新しい駆逐艦が不足し、地中海でドイツのUボートの跳梁(ちょうりょう)に悲鳴をあげていたフランスは、そこで聯合國の一員である日本の造船技術に目をつけ

た。

長門起工の年、日本がフランス政府から頼まれて造った駆逐艦は十二隻ある。横須賀、呉、佐世保、舞鶴、及び三菱長崎、川崎神戸の六ヶ所で手分けをして二隻ずつ建造した。資材も、各種の工程や工事の監督も一切日本に委ねられたので、日本側では名前に困って、一番駆逐艦、二番駆逐艦という風に呼んでいた。そのうち呉工廠が担当したのは、三番駆逐艦と四番駆逐艦であった。

フランス海軍は、受領後この十二隻を、「トリビューン型」(民族型)、又は、「ティープ・ジャボネ」(日本型)と呼称し、一九三四、五年ごろまで、現役の駆逐艦として使っていた。「民族型」というのは、「アルジェリアン」「トンキノワ」など、フランスの植民地に縁のある民族の名前をつけたからである。呉で出来た二隻は、「アラブ」「バンバラ」(中央アフリカの一種族)と命名された。非常な急速建造で、三番駆逐艦「アラブ」を例にとると、大正六年三月一日起工、同年六月二十一日進水、七月二十一日には竣工している。主機械もタービンは時間がかかるので、レシプロ・エンジンを取りつけられた。三番駆逐艦は試験を終り、大正六年の八月一日、日本の軍艦旗をかけて佐世保を出港、九月十九日、ポートセイドでフランス海軍に引渡された。四番駆逐艦は、九月十五日佐世保出港、十月三十日、同じくポートセイドで引渡しを終った。

第一次大戦中、日本は英国の同盟国として十二隻の駆逐艦を地中海に派遣したので、実際には合計二十四隻の日本製の駆逐艦が地中海で活躍していたことになる。

「ティープ・ジャボネ」は、三本煙突、常備排水量約七百トンの小さな駆逐艦であったが、これだけ早く造ることが出来たのには、それなりの下地があった。大正三年から四年にかけて、日本は、樺、檳、楓、梅、桐など、新しい二等駆逐艦十隻を急造している。「樺型」と呼ばれ、建造期間は大体四ヶ月であった。中でも樺は、戦闘艦艇急造の世界新記録を樹立した。

世界一の好きなアメリカは、これを口惜しがり、一九一八年(大正七年)第一次世界大戦が終るとすぐ、ロングビーチの海軍工廠で、千二百トンの駆逐艦「ウォード」を三十四五日で造り上げて、日本の持っていた記録を更新した。それから二十三年後の一九四一年、ホノルル時間で十二月七日の朝六時四十五分、真珠湾口に進入しようとする小型潜航艇を発見して砲撃と爆雷攻撃を加え、日本艦隊に対する最初の火蓋を切った駆逐艦がこの「ウォード」であったのは、奇妙な因縁である。

呉工廠の造船ドックは、かつて初の国産戦艦扶桑を生み、フランスの駆逐艦「アラブ」と「バンバラ」を生み、長門

を生み、のちに拡充されて大和を生んだ。

これは艦船建造専門のドックで、「船がドック入りする」という時の修理ドックとは別のものである。当時日本にはたった一つしか無かった。

実に巨大な施設で、底へ下りると高層ビルの谷間に立っているような感じがするし、上からのぞきこむと、目まいを覚えるようなほど深い。戦艦扶桑以来の由緒あるこのドックは、最近まで石川島播磨呉造船所の第一造船ドックとして生きていたが、昭和四十六年の暮、フェアフィールド号という十三万八千トンのリベリヤ籍のタンカーを送り出したのを最後に、六十年の歴史を閉じた。かたちとしては残るけれども、ブロックの組立場になって、もう船を生み出すことはない。

ブロック工法で近代化された今の造船工事では、起工式とか進水式とかいった行事は、次第に姿を消しつつある。起工式や進水式に一々感激はしていられないし、したがって「千五十トン祝い」で一升瓶を傾けている工員の姿も、もう見られない。そういう豪傑風の名人気質は当節仕事の邪魔になるだけだそうだが、長門の建造にたずさわった職工たちは、よくもあしくも今とはちがう古い職人肌の人々であった。

のちの工員、当時の職工には色んな職種があつて、造機部の職工、砲^{はう}煩^{らん}部の職工、電機部、水雷部、造船部――、

その下がまた、製図、鋳打ち、溶接、足場という風に小さく分れていた。足場員は、ビルディングの工事では、高所作業を受け持つ鷹^{とび}職である。彼らが大きな軍艦の、見上げるように高いマストのてっぺんで艀^{せき}装をやっているところなどは、なかなかの壮観であつた。

各方面のこういうエキスパート、熟練工が何千人と寄り集ま一つ一つの工廠を形成している。

大正中期の日本で、海軍工廠ほど龐大な技術者集団は、ほかに無かつた。

呉や横須賀の町の経済は、軍人よりも実際は工廠の職工職員とその家族で持っていた。

色は黒く指は太く、顔はしわだらけ、薄ぎたないナツバ服を着ていても、組長ともなれば、そのへんの小ぎれいな中尉さんあたりより給与もよかつたが、呉の眼鏡橋の先、鎮守府の第一門を過ぎると、左手に広い練兵場があつて、そこに、

「牛馬職工通ルヘカラス」

という制札が立っている。練兵場を斜めに突っ切らせてくれば、工廠への近道なのだが、職工はそこを通れなかつた。

職工の始業時刻は朝七時で、冬、阿賀の方から山越えで通勤する者は、みなガンダー提灯をぶら下げて来る。帰日も、ガンダー提灯を照らして帰って行く。

靴の者はまれで、ほとんどがわらじばき、電車にも乗らず、徒歩でかよっていた。雨の日には道がぬかるんで、わらじが役に立たなくなるが、はだして通ろうとすると、番兵が、

「こちら、職工。はだして通っちゃいかん」

と呼びとめる。仕方がないから、かたちだけわらじを突っかけて、番兵のところを過ぎたら捨ててしまおう。雨の翌日は、眼鏡橋のたもとに古わらじの山が出来た。

屋の食事も、職工は自分で金を払って食うのに、それが官給の兵食より悪かった。いわゆる大正デモクラシーの時代で、レーニンが亡命先のスイスから露都に帰着して「四月テーゼ」を発表したのも、三菱長崎造船所でストライキがおこり、労働者が三割の賃上げ闘争に勝利をおさめたのもこの年（大正六年）にあたり、当然彼らは時代風潮に敏感になっていた。「ナッパ」と言って嘲られること、「海軍は軍人万能で、実際にフネを造る自分たちを人間扱いしてくれない」ことに、強い不満があった。

しかし、多くの者が昔気質^{かたがた}の職人で、仕事だけは熱心で丁寧だったし、また海軍が、牛馬なみに彼らを扱うばかりで何も報いるところが無かったかという点、必ずしもそうではない。

長門の工事に関係した「職工」の現存者は、もう数が少ないけれども、私の出あった呉在住の山崎宗一、森照雄、

古川忠の三人は、いずれものちに英米留学を命ぜられてゐる。古川忠は昭和十四年から十五年にかけて、ロンドンで暮した。森照雄と山崎宗一も、同じころ海軍監督官の助手として、ニューヨークに在勤した。

もちろん、すべての工員が海外へ出されたわけではないし、長年よく働いた御褒美として、海軍が官費で、彼らに外国見物をさせてくれたわけでもない。それにはそれなりの、理由と必要とがあった。

職工のうち推薦をうけ特に銓衡された者は、ある年月経つと、海軍技手養成所へ入れられる。技手養成所、略称「技養」では、民間の高等工業学校と同程度の教育をほどこしていた。したがって、外国語も多少は出来る。

重要な新聞記事のチェックぐらいは委^{まか}せておけるし、工場見学に行けば、

「この工作機械は、ここが欠点です」

というようなことは、彼らの方がよく分る。

海外駐在の海軍監督官は、職工上りの技手クラスを部下に持つことで、大いに仕事の能率を上げ得たのである。彼らに向うの新しいものを吸収させて、造艦技術の将来に備える意味もあった。

仕事一方ではなく、遊びの方も適当にやった。ヨーロッパ各地の監督官と監督官附の技手とが、一と冬スイスに集まってスキーを楽しむというような機会もあった。

「あの頃、あなたは何処に住んどったかいのう？」

「わしか？ わしはマンハッタンのリバーサイド・ドライヴに下宿しとった」

「そうそう。訪ねて行ったことがあるよ。サイパンで戦死した矢野英雄大佐がニューヨークに来て、よう世話してもらうたよのう」

八十に近い山崎、森、古川の三老人が、広島弁でこういう話をするのは、傍で見ているとさか驚くべき光景であったが、彼らに限らず、古い技養出身者の約半数は、外国生活の経験を持っていた。

日米間の風雲が急を告げはじめたころ海軍に入った若い造船科の士官たちも、おやと思うような現場のオッさんが、「フランスの田舎の宿で、朝食うクロワッサンとカフェ・オーレーが美味うてのう」

とか、

「ロンドンにはコクニーいうもんがあつて、地下鉄の切符を買うのに、ウエスト・ケンジントンいうても通じりゃあせんよ。上杉謙信いうたつたら通じるんじや」

などと、食卓で昔話をするのを聞いて、私と同じように驚いたものだそうである。

今とちがい、日本人の海外旅行が、きわめて限られた階層の人々のものであつた時代に、これだけ多数の「職工上り」をロンドンやニューヨークに学ばせたのは、一つの英

断であつた。

海軍は大和魂とすじの陸軍とちがい、西欧の近代科学と技術とを無視しては立つて行くことが出来なかつたし、海軍工廠を底辺で支えている者が、ほんとの山出しのわらじばきばかりでは、先進国の戦艦と対決出来る戦艦の建造など、不可能なことであつた。

昭和十五年の暮、古川忠がロンドンからアメリカまわりで帰国する時、在ニューヨークの海軍監督長に、通称「ストップさん」と呼ばれる機関科の中村止大佐がいた。古川は「ストップ大佐」から、

「お前、パナマを通つてな、パナマの軍備をよく見て帰ってくれ」

と頼まれ、「パナマ運河を通過する時には、めしも食わず、眼を皿のようにして外を見ていたけれども」別に何もあはしなかつた。

そのころの古川は、すでに一人前の技師で、部内に「船殻フナカラの古川」として知られていたが、長門が起工された大正六年、彼が高等小学校を出て、十七歳で呉の工廠へ入った時は、日給二十銭の見習工である。

成績がよければ、二銭単位で、一年間に八銭から十二銭ぐらい昇給する。

物価の方も安かつた。活動写真が五銭、米一升二十五銭から三十銭、中通りを歩いて、仲間と朝まで芸妓をあげて

豪遊して五円もあれば足りる時代であった。先輩の組長や工手たちは、飲みに行く時は仙台平の袴、夏は夏羽織を着て、

「これをカタに遊ばせてくれや」

などと、鎖で帯に巻きつけた十円金貨をじゃらつかせたりしていた。

古川のような見習工が、正規の職工に採用され、やがて平職工から伍長に昇進すると、一とかどの熟練工、一番小さなユニットの長として三四人の部下を持つ。伍がいくつか集まったものが組で、組の親方が組長である。その上に工手がいる。これはもう、その道その道の非常なエキスパートで、事務所に専用の机を据え、数百人の部下とお茶汲みの女の子まで使ってなかなか威張っていた。

ところが、技手養成所を卒業して、工手が技手に出世すると、途端に給料が約半分に減ってしまう。それは、こんにちで言えば、国家公務員の給与体系に組み入れられるからである。

そこで海軍の工廠では、特務工手という役職名を作って、部内限り判任官待遇、身分は一段落ちるが官吏の俸給規定にはしばられないという人の使い方も編み出した。

職工たちの生活は、一応安定していた。殊に設計の者は、よく養子にねらわれた。山崎宗一老人も、ねらわれて養子になった製図工——のちの設計技師である。

呉には、明治の初年から親代々工廠勤務という家庭がいくらかあつて、そういう家では、朝、父親と息子がいっしょに弁当を持ってつとめに出る。息子は親から、問はず語らずのうちに職人としての何ものかを受けつぐ。こうした時代の呉で、こういう人々の手で、長門の建造は進められていた。

第二章

「うわばみ」どもの「千五十トン祝い」が二千トン祝いになり、三千トン祝いになり、伊藤乙次郎中将が第一鉦の槌を振るった鉄材の上に鉄材が組み上げられて、起工式から一年後には、長門がようやく船としてのかたちを見せはじめた。

瀬戸内海の夏の夕風ゆうなぎは有名である。まわりを高い石の壁で囲まれた造船ドックの中は、とりわけ、風のほとんど通らない暑熱と騒音の作業場であった。裏の山で暑さをかき立てるように鳴いている蟬の声も、ここまでは聞えて来ない。

当時ニューマチック・ハンマー（圧搾空気による鉦打ち機械）がすでに開発されていたが、古い職工の中には、「手打ちでなけりゃ、鉦がしまらん」

と言って、監督がいないと手打ちに変えてしまおう者がいた。まっ赤に焼けた鉦を、二人のサキ手が汗だらけになって支えている。それを力まかせに、ハンマーでなぐりつける。船底の外板を手打ちでやる時など、ハンマーの振えるすき間が一メートルくらいしかない。仰向けでハンマーを使う苦しい作業であった。鉦をしめこむことを「かしめる」と言ったが、職工の汗とともに、長門にかしめこまれた鉦の数は、全部で四百万個にのぼる。

大正七年のこの暑い夏、長門の建造工事たけなわのところ、第一次世界大戦による物価騰貴が原因で、富山県の漁師の女房たちが米屋や富商をおそい、「女一揆」をおこした。それがきっかけとなって、日本全国にいわゆる米騒動が発生した。騒ぎは呉の町にも波及して来た。

人心は落ちつかず、工廠の労働者の中にも、騒ぎにまきこまれる人間が出る。警察のまわし者が、

「やれ、やれえ」

と煽動するのに乗って、

「よし、やったるど」

と暴れ出すのがあると、うしろから私服の刑事が襟首にインクをつけて歩く。あとでインクを目じるしに、

「ちよっとお前、来いや」

としよっ引いて行く。

伊藤中将に替った小栗孝三郎工廠長は、富山の女一揆か